

平成 22 年 5 月 14 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19510242  
 研究課題名（和文） スターリン時代のソ連国境地帯における民族問題と統治政策に関する基礎的研究  
 研究課題名（英文） Fundamental Study about the ethnic problems and the governing policies on border areas in the Stalin Era  
 研究代表者  
 寺山 恭輔（TERAYAMA KYOSUKE）  
 東北大学・東北アジア研究センター・准教授  
 研究者番号：00284563

研究成果の概要（和文）：スターリン体制確立期にあたる 1930 年代について、主要な決定機関たる政治局の諸決定を特別ファイルを含めてほぼくまなく収集したが、その他の史料館の史料も利用しながら、最初の事例としてソ連のモンゴル政策について本にまとめた。当該問題に関連して、秘密警察その他これまでアクセスの困難であった史料を利用した多くの著作を収集し、アルヒーフ史料とともに、新疆、ソ連極東地域について著作を準備中である。その他の地域についてもまとめる作業を行っている。

研究成果の概要（英文）：As a first example of this broad study, I published a book about Soviet Policies toward Mongolia (from Manchurian Incident to Nomonhan Incident) on the basis of protocols, including “Osobaia Papka”, of the Politburo – the most important decision-making organ of USSR in 1930s’ with the other archives materials. On this subject I have also collected many works that use inaccessible so far materials from secret police archives. Using these materials I now prepare the works about Sinkiang and Soviet Far East.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：地域研究

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：ソ連国境 スターリン体制 民族問題 民族移動 亡命 国境警備

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 筆者の関心はとくに満洲事変を契機と

した極東情勢の変化がスターリン体制に及ぼした影響を考察することだったが、特にス

スターリンのパーソナリティーにも深く関係していると思われる安全保障上の懸念、すなわち資本主義諸国に周辺を包囲されており、それからの攻撃の危険性にさらされているという思考方法をより深く理解することがスターリン体制の理解にとって必要なのではないかと考え、極東ばかりでなく全ソ連国境に目を向けることにした。

(2) 各地域では対峙する国に応じて対応は様々であり、時には軍事紛争に至る例もあったが、それぞれの地域の情勢を個別具体的に考察・比較することにより、国境問題を通してスターリン体制を考察することを検討した。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、ソ連形成期からスターリンの死(1953年)に至るまで、ロシア・ソ連の国境が大きく変動した時期に関して、地域的に全国境を八区分(フィンランド、西北部、西部、カフカース、中央アジア、新疆、モンゴル、極東)、時期的に四区分(国境形成、戦間期、戦時国境縮小・拡大期、戦後)し、特に国境地域に居住する民族問題に焦点を絞りつつ、国境隣接国との歴史的関係、国境成立にいたる背景、地勢学的特徴、民族構成、宗教・経済関係、国境線をめぐる紛争、国境変動の要因と変動過程、ソ連全体の安全保障的観点から判断される当該地域の持つ軍事的意味等の諸問題について個別に検討を加えるとともに、国境警備隊の整備や税関の機能等全国的な国境統治の実態を解明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 当該分野に関する基本的文献(旧レーニン図書館等)を収集する。  
(2) 関連した史料を各公文書館(ロシア国家社会政治史史料館、ロシア連邦国家史料館、ロシア国家軍事史料館等)で収集し、それらをもとに新たな知見を提供する。

## 4. 研究成果

(1) 対モンゴル国境については、1931年の満洲事変から1939年のノモンハン事件にいたるまでの1930年代のスターリン指導部の政策決定過程について詳しくまとめ、叢書の一冊としてまとめることができた。軍のアルヒーフに保管されている「モンゴル委員会」史料は一切アクセスを許されなかったため、スターリン指導部が行った対策の理由等に触れることができず、将来的な課題である。モンゴルに対しては外国でありながら軍隊の駐留、予算の決定など実質的にはソ連の植民地的な支配下に置かれていたことをこれまでになく詳細かつ具体的に明らかにして

いる。

- (2) 極東国境については帝政時代のプリアムール総督の活動を考察したドゥビーナ教授の三部作をまとめることにより、19世紀半ばから1917年までの極東ロシアが置かれていた状況について考察し、本研究が想定する革命後のスターリン時代を考察するための準備作業を行った。この地域については、極東ソ連に対峙する『満洲国』内の白系ロシア人亡命者について近年日本でも関心が高まり、多数の著作が刊行されているが、肝心の極東ソ連内部の状況については日本でまとまった著作は出ていない。モンゴルに比べて取り扱うべき史料が膨大で、関連著作も多数出版されておりモンゴル同様一書にまとめるべく検討を加えている最中である。この地域についてもモンゴル同様政治局における政策決定過程については史料収集を終えた。
- (3) 同じ中国領でありながら満洲とは異なり、一時期ソ連の強い影響下にあったのが新疆である。この地域についてはソ連崩壊後、アルタイの研究者バルミンがアルヒーフ史料を用いて考察していただけであったが、最近になって新疆をめぐる英ソ日米中独各国の思惑を交え、ソ連の対新疆政策について考察を加えたカザフスタンのジャーナリスト、オブホフの著作(2007年)が刊行された。これは秘密警察の史料や関係者の回想を交えてソ連・新疆国境の状況を詳しく伝えており、注釈がついていない点に難はあるが、参考になる。筆者はモンゴル同様政治局における対新疆政策についても史料を集めたので論文にまとめている最中である。英国公文書館、大英図書館で閲覧した史料に、新疆におけるソ連の活動について言及したものも含まれており、日本のアジア歴史資料センター所蔵史料と合わせて立体的に考察することが可能になりそうである。以上でソ連の東部国境地域、満洲、モンゴル、新疆についてのある程度の見取り図が描けるのではないかと考えている。
- (4) イラン国境については、最近精力的に研究を進めているオリシェフの著作が2009年に刊行された。イランの場合はナチス・ドイツの浸透への対抗という側面が強いが、日本人にとってはアクセスの困難が予想されるアルヒーフ史料を使っており参考にできそうである。イランの場合はとくにソ連側ではアゼルバイジャンの状況を調べる必要があるが、ガサンリイがアゼルバイジャンにおける民族問題とソ連・イラン関係についてまとめた著作を入手した。革命直後のソヴィエト政

権によるペルシャへの干渉に関するペルシツの著作を含め、ソ連・イラン関係についての研究がかなり蓄積されつつある。同じくガサンリィがソ連・トルコ関係についてもまとめている。アフガニスタン国境について 2006 年に出たネシュモフの著作、列強のアフガニスタン政策について 2008 年に博士学位をとったティエホフがスターリンのアフガン戦争という題名で同年出版した著書も入手した。このように、中東諸国とソ連の国境をめぐる著作が最近になって刊行され出している。この分野については残念ながら自らがアルヒーフ史料を駆使して著作をまとめる水準には達していないので、書評の形でこれらの作品を紹介する作業を今年度中に行いたい。

- (5) ポーランド国境についてはおそらくどこにもまして史料が豊富な地域であろう。クロミヤがウクライナにおけるテロル被害者の手書きの尋問調書を分析した際に言及している通り、ポーランド諜報員のソ連、特にウクライナにおける活動をスターリン指導部は憂慮し、日本の存在と共に予想される戦争を前に、それが 1937-38 年の大テロルの主因だったとの説はテロルの被害者の民族の割合から見ても説得力がある。これは筆者がフィンランドと国境を接するカレリア、ムルマンスク、レニングラードの状況を考察した際のデータとも符合する。したがって国境における民族問題からスターリン体制の成立、発展を考察することには相当大的な意義があるとの当初の想定は、以上のような最近の研究の進展を見ていくと妥当であったとの印象を抱かざるを得ない。ポーランドと国境を接する地域についての史料も集めてきたのでいずれ論文の形でまとめることにしたい。
- (6) 1990 年代に閲覧を許されていた史料が入手しにくくなったとの苦情がある一方で、治安機関その他通常はアクセスが困難と思われる場所で史料を閲覧した若手研究者が、それらをふんだんに活用し、ソ連周辺地域に対するスターリン指導部の政策をまとめる作業を行い、それらが次々と刊行されている。日本人である我々がそれらを利用できるのかどうかはまた別の話になるが、この科研費の受領を受けた期間にも、国境地区に関する史料の所在を多数確認することができたので、さらに研究を深めるべく新たな科研費の獲得に向けて申請を行う予定である。とりあえずは、上述の研究成果を論文或いは著書の形でまとめることに力を入れたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ① 寺山恭輔、「反歴史捏造委員会設立とロシアにおける歴史観をめぐる闘争」『日本国際問題研究所ロシア研究会報告書』、査読無、2010 年 3 月、134-150 頁。
- ② 寺山恭輔、論点開示「ロシア・ソ連の国境と国家：対モンゴル、フィンランド政策」2008 年度西洋史研究会大会共通論題『現代連邦制の世界史的位相—解体と統合の諸相—』『西洋史研究』、新輯第 38 号 (2009 年 11 月)、査読無、167-176 頁。
- ③ 寺山恭輔、第二部第五章近代化と社会主義 5.1 「社会主義時代のシベリア・極東」境田清隆他編集『東北アジア』立川武蔵・安田喜憲監修『新世界地理』第二巻 (朝倉書店)、査読無、2009 年、140-149 頁。
- ④ 寺山恭輔、「外交からみたソ連の政策決定過程」『日本国際問題研究所ロシア研究会報告書』、査読無、2009 年 3 月、99-119 頁。
- ⑤ 寺山恭輔、「書評ロイ・メドヴェージェフ『スターリンと日本』」『ロシア・ユーラシア経済—研究と資料』、査読無、2008 年 10 月号、44-48 頁。
- ⑥ 寺山恭輔、「ソ連における対日戦勝記念日」川島真、貴志俊彦編『資料で読む世界の 8 月 15 日』、査読無、山川出版社、2008 年 7 月、155-166 頁。
- ⑦ 寺山恭輔、「ロシア・東欧・北欧」『史学雑誌：2007 年の歴史学会—回顧と展望—』、査読無、第 117 編第 5 号、2008 年 6 月、379-384 頁。

[学会発表] (計 7 件)

- ① 寺山恭輔、「「歴史偽造」対抗委員会とロ

- シア歴史学』、『日本国際問題研究所ロシア研究班』、2009年7月31日、東京
- ② 寺山恭輔（司会）、『ロシア極東研究会』（ロシア語）、2009年5月23日、東北大学東北アジア研究センター
  - ③ 寺山恭輔、「1930年代後半のソ連極東における動員政策」、『西日本ロシア・東欧史研究会』、2009年3月7日、神戸大学
  - ④ 寺山恭輔、「外交からみた現代ロシアにおける政策決定過程」、『日本国際問題研究所ロシア研究班』、2008年12月2日、東京
  - ⑤ 寺山恭輔、「ロシア・ソ連の国境と国家」（論点開示）、2008年度西洋史研究会大会共通論題『現代連邦制の世界史的位相—解体と統合の諸相—』2008年11月23日、東北大学
  - ⑥ 寺山恭輔、「1930年代ソ連の対モンゴル政策と日本」、『20世紀と日本研究会』、2008年8月9日、姫路プラザホテル
  - ⑦ 寺山恭輔、「1930年代ソ連の対モンゴル政策」『九州ソ連・東欧研究会』、2007年12月27日、福岡教育大学

〔図書〕（計 4 件）

- ① 寺山恭輔、第四章「ソ連における検閲」松井康浩[編]、『20世紀ロシア史と日露関係の展望—議論と研究の最前線—』、87—108頁、九州大学出版会、2010年3月。
- ② 寺山恭輔、「ロシア極東の形成—N.I.ドゥビーニナ著『プリアムール総督』三部作より—」『東北アジア アラカルト』第23号、2010年1月、74頁。
- ③ 寺山恭輔、「1930年代ソ連の対モンゴル政策」『東北アジア研究叢書』第32号、2009年3月、128頁。
- ④ 寺山恭輔編、斉藤由佳・前田ひろみ訳「ロシアの北太平洋進出と日本—「ロシア領アメリカの歴史」から」『東北アジア ア

ラカルト』第20号、2009年3月、237頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

寺山 恭輔 (TERAYAMA KYOSUKE)

東北大学・東北アジア研究センター・准教授

研究者番号：00284563